19 皮膚科 Dermatology

●教室(診療科)の特色●

大阪北摂地区の基幹病院として common skin disease の難治例から皮膚悪性腫瘍、重篤な皮膚疾患、皮膚科救急疾患まで、すべての皮膚疾患に対応できる皮膚科診療を展開しています。また、日本皮膚科学会の主研修施設として、最先端の知識と技術を持ち自ら考え解決する高いモチベーションを持つ皮膚科専門医の養成を行っています。病診連携、病病連携を大切にし、患者第一主義で最新・安心・安全・確実な皮膚科医療を地域に提供することを当科スタッフ全員のポリシーとしています。

森脇 真一(もりわき しんいち)**教授(科長)**

■専門分野
光皮膚科学、遺伝性皮膚疾患

■職歴
昭和61年　大阪医科大学卒業(現 大阪医科薬科大学)
平成 4年　医学博士、皮膚科専門医
平成 4年～ 6年　米国国立衛生研究所
平成 6年～10年　兵庫県立尼崎病院
平成10年～17年　浜松医科大学
平成17年～大阪医科大学(平成21年より現職)(現 大阪医科薬科大学)

■主な学会／専門医資格
日本皮膚科学会(代議員)／皮膚科専門医・責任指導医、難病指定医
日本美容皮膚科学会(理事)、日本研究皮膚科学会(評議員)
日本光医学光生物学会(理事)、日本香粧品学会(理事)
日本小児皮膚科学会(運営委員)、日本皮膚悪性腫瘍学会(理事)

●診療科の概要・特徴●

皮膚疾患の中でも特に光線性皮膚症、遺伝性皮膚疾患に関しては、本邦でも屈指の高い専門性を有しており、中でも「色素性乾皮症」「コケイン症候群」では、確定診断、遺伝子検査を希望して全国から患者が紹介されます。難治性あるいは重症アレルギー性皮膚、発汗障害(特発性後天性全身性無汗症など)疾患の診断・治療、皮膚がんの集学的治療・皮膚外科、乳児血管腫治療や遺伝性血管性浮腫への対応にも積極的に取り組んでいます。その他、しみ・あざ外来、巻き爪外来、皮膚アレルギー外来、乾癬外来、メイクアップ看護外来において専門医療の提供を行っています。

●教室(診療科)指導医・上級医●

氏 名(職 掌)	専 門 医	専門分野
福永　淳(准教授)	皮膚科専門医、アレルギー専門医・指導医	皮膚アレルギー、じんましん、発汗障害
大塚俊宏(講師、病棟医長)	皮膚科専門医、レーザー専門医	レーザー医学、皮膚腫瘍、皮膚外科、爪矯正
金田一真(講師(准)、外来医長)	皮膚科専門医	乾癬、アトピー性皮膚炎

■連　絡　先：大阪医科薬科大学医学部感覚器機能形態医学講座皮膚科学　TEL：072-683-1221（内線2355 医局）
■ホームページ：https://www.ompu.ac.jp/u-deps/der/index.html

初期研修プログラムの特徴

皮膚科医を目指す医師のみならず、臨床医として最低限求められる皮膚疾患の診断、検査、治療の基本的な知識と技術が習得できます。将来皮膚科を標榜する医師のためには、日本皮膚科学会専門医旧制度では皮膚科専門医試験の受験資格を取得するための5年間の研修経験期間の初年度とすることができました。しかし、皮膚科新専門医制度では、研修期間は初期臨床研修終了後、研修プログラムに登録してから5年間となりますので、初期臨床研修期間は専門医研修機関には含まれません。

研修内容と到達目標

＜卒後1～2年目＞　（初期研修中の皮膚科選択期間）

❶日常よく経験する皮膚疾患の正しい診断と適切な治療が行える。
❷皮膚科医療の場でよく行われる各種皮膚科検査、治療（真菌検鏡、光線療法、外用療法、薬物療法など）を熟知し、適切に実施できる。
❸皮膚科救急疾患（蕁麻疹、薬疹、熱傷など）に迅速に対応できる。
❹各種皮膚科診療ガイドラインを正しく理解し、主治医が実施する検査、治療の補助が行える。
❺主治医のもとで病棟入院患者の検査、治療および検査結果や臨床経過に対する正しい評価ができる。

研修病院群

大阪医科薬科大学病院

評価方法

到達目標に対する自己評価、指導医評価が行われる。

皮膚科外来

皮膚科スタッフ

週間スケジュール

	午　前	午　後
月曜日	外来診療	褥瘡回診、検査、外来手術、病棟業務、メイクアップ看護外来（随時）
火曜日	外来診療、手術	専門外来（皮膚アレルギー）、検査、手術、病棟業務
水曜日	外来診察	検査、手術、病棟業務
木曜日	外来診療、専門外来（乾癬）	専門外来（光線遺伝、爪、レーザー）、検査、外来手術、病棟業務
金曜日	外来診察、アレルギーセンター専門外来	抄読会、教授回診、臨床・病理カンファレンス・医局会、病棟業務
土曜日（第1.3.5）	外来診療、病棟業務	病棟業務（随時）

後期研修プログラムの特徴

研修プログラム

＜卒後3年目以降＞

皮膚科専門医取得のための正式な研修期間がスタートする。皮膚科医として多くの皮膚疾患患者と接し、「皮疹を診る眼」を養い、専門性の高い検査法や治療法の技術を習得させる。さらに、外来、入院で経験した患者に対し、単なる皮膚科診療のみならず、各症例を深く正しく理解し、興味深い症例に対しては学会発表や論文作成を行うことによって、その情報を世界に発信できるよう指導する。

本プログラムにおいて、後期研修医（レジデント）は上級医の指導のもと、外来、入院を問わず各分野の多くの皮膚疾患を経験し、疾患病態の理解を深め、自ら検査、診断、治療にあたる。さらに専門外来の現場に入り、専門医療の知識、技能、態度のあり方を学ぶ。この間、皮膚科専門医試験を受験する資格を得るために必須の受け持ち症例、手術症例の蓄積を行い、同時に専門医取得に必要な学会発表や論文作成の能力も身につける。後期研修期間中または終了後に大学院に進学して、皮膚科専門医取得と並行して、学位取得を目指すことも可能である。

研修内容と到達目標

❶各種皮膚科検査・治療（各種アレルギー検査、光線照射試験、ダーモスコピー検査、皮膚生検、皮膚科的処置、光線療法、巻き爪矯正、レーザー照射、皮膚外科的手技、悪性腫瘍に対する化学療法など）を習得し、実施できる。
❷指導医のもとで一般皮膚科外来を担当できる。
❸生検・手術標本の病理学的所見を正しく説明できる。
❹ダーモスコピー検査の所見を的確に説明できる。
❺アトピー性皮膚炎や尋常性乾癬をはじめとする慢性難治性皮膚疾患患者に対する適切な検査、治療および生活指導ができる。
❻文献検索の方法を学び英語論文の熟読に精通し、経験症例を学会にて発表し、論文化できる能力を身につける。

皮膚科新専門医制度について

2018年度から大阪医科薬科大学病院皮膚科が研修基幹施設となり、淀川キリスト教病院皮膚科、高槻赤十字病院皮膚科、市立ひらかた病院皮膚科、北摂総合病院皮膚科を研修連携施設として、また、第一東和会病院を研修準連携施設として加えた研修施設群を統括する研修プログラムがスタートした。2019年度からは新たに、兵庫県立尼崎総合医療センター皮膚科、藍野病院皮膚科が研修連携施設に加わった。本プログラムでは、各研修期間の特徴を生かした複数の研修コースを設定しており、皮膚科領域の一般的な知識から専門的な知識、技能（皮膚外科、美容皮膚科を含む）に至るまで幅広く習得できる。研修基幹施設では主として皮膚科医としての基本姿勢、重症、緊急、悪性皮膚疾患への対応を学ぶ。大学院生として学位取得と並行した研修も可能である。研修連携施設では、急性期皮膚疾患、慢性皮膚疾患、common skin diseaseに適切に対応できる総合的な診療能力を培う。研修準連携施設では一般皮膚科と並行して美容皮膚科、地域医療、老人医療を学ぶ。

この専門研修プログラムで研修することにより、皮膚科専門医として信頼され安全で標準的な医療を国民に提供できる充分な知識と技術を獲得することができる。本プログラムにおける皮膚科専門医取得のための5年の間に、皮膚科の中で特に興味ある分野（皮膚外科、皮膚アレルギー、光皮膚科、皮膚病理、美容皮膚科など）が見つかれば、将来の専門分野としてさらに深く修練を積めるような指導体制も整えている。

手術風景

臨床・病理カンファレンス

プログラムに参加する医療機関等

（研修基幹施設）大阪医科薬科大学病院皮膚科
（研修連携施設）淀川キリスト教病院皮膚科、高槻赤十字病院皮膚科、北摂総合病院皮膚科、兵庫県立尼崎総合医療センター皮膚科、恒昭会藍野病院皮膚科
（研修準連携施設）市立ひらかた病院皮膚科、第一東和会病院皮膚科

取得できる認定医・専門医

日本専門医機構認定皮膚科専門医

2021年度臨床実績

手術件数：173件
皮膚生検術件数：431件
アトピー性皮膚炎（初診）患者数：87名
紫外線療法：3,243件
巻き爪矯正：57件
レーザー治療：238件
色素性乾皮症、コケイン症候群の分子細胞診断：8件
遺伝カウンセリング：11件

参加学会と学会活動

日本皮膚科学会総会／日本皮膚科学会中部支部学術大会
日本皮膚科学会近畿集談会／日本皮膚科学会大阪地方会
日本臨床皮膚科医会／日本小児皮膚科学会
日本皮膚悪性腫瘍学会　等
2013年度は第31回日本美容皮膚科学会を担当、2015年度は第4回光皮膚科学研究会を担当、2017年度は太陽紫外線防御研究委員会 第28回シンポジウムを主催した。2020年度には第44回日本小児皮膚科学会、2021年度は第43回日本光医学・光生物学会と第4回日本フォトダーマトロジー学会を主催した。

主なる関連病院

高槻赤十字病院／市立ひらかた病院／淀川キリスト教病院／兵庫県立尼崎総合医療センター／北摂総合病院／第一東和会病院／恒昭会藍野病院／清仁会洛西シミズ病院

大学院における研究活動

当科での研究の基本姿勢は「患者のためのclinically – oriented research」の推進である。医学研究は医科大学における重要な業務のひとつであり、また短期間であっても若い医師が研究を経験することにより、「患者のために常に疑問をもち自ら考え解決する」能力を身につけることができるものと考えます。現在教授、講師の指導のもとに若手スタッフがともに日夜研究に励んでいます。

1. 遺伝性光線過敏症の分子遺伝学

紫外線性DNA損傷修復能の異常で発症する遺伝性光線過敏症の分子細胞診断

色素性乾皮症（XP）、コケイン症候群（CS）、トリコチオディストロフィ（TTD）、紫外線高感受性症候群（UVSS）などの遺伝性光線過敏症の診断センターを本学皮膚科学研究室にて立ち上げ維持している。全国から来院する患者由来あるいは送付されてくる検体（皮膚、血液等）を用いて、各種DNA修復試験、分子細胞生物学的解析によりこれらの疾患の確定診断を行っている。この診断過程で経験した特に興味ある症例については世界に発信すべくさらに詳細に解析している。さらに、神経皮膚症候群に属する難病でもあるXP、CS患者に見られる進行性脳神経障害の発症機序の解明、根治的治療法探索のため、酸化ストレス、酸化的DNA損傷の修復という観点からの分子細胞生物学的検討を行っている。また、これらの患者への放射線の使用には是非があるため、放射線照射後のγH2AX検出システムによりXP、CSにおける二本鎖切断の修復応答を解析している。

2. 皮膚科領域での遺伝医療の展開

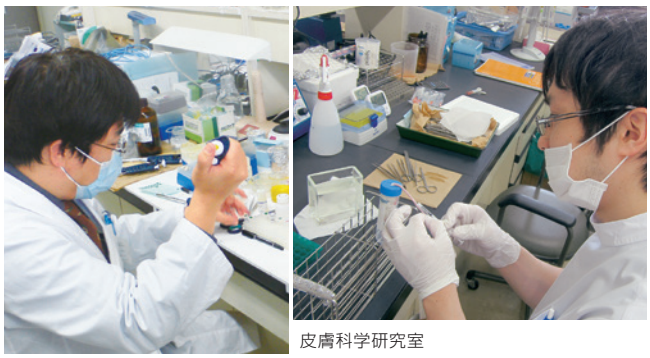
前述の疾患のみならず、すべての遺伝性皮膚疾患（遺伝性色素異常症、母斑症など）に対して遺伝カウンセリングを中心とした遺伝医療を行っている。遺伝性光線過敏症では当科で遺伝子診断が可能であり、重篤な色素性乾皮症A群では保因者診断、出生前診断も適宜施行している。XP、CSに関しては患者家族会への支援などの社会活動も積極的に行っている。

3. 光老化・光発がんの病態解明と皮膚アンチエイジング

酸化、糖化、DNA損傷、基底膜という観点から、光老化、日光角化症などの露光部皮膚悪性腫瘍の発症の分子機構を明らかにし、EBMに基づいた皮膚老化や皮膚がんの予防法の提唱を行うことを目指している。さらに皮膚トラブルによる患者QOLの変化という観点からメイクアップの重要性を看護学部と共同で検討中である。

4. マウスモデルを用いた皮膚アレルギー研究

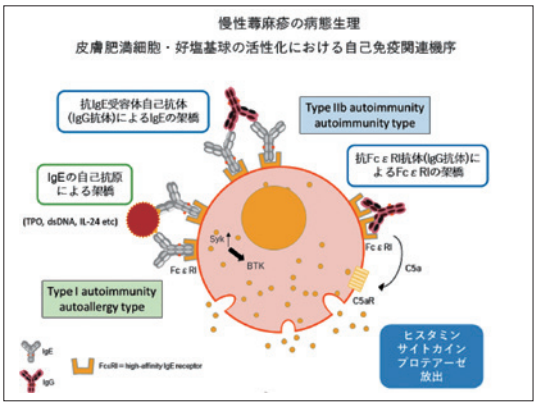
アトピー性皮膚炎、薬疹、皮膚感染症、創傷など各種疾患モデルマウスを用いて、それぞれの疾病出現時に皮膚に生じる分子病態の解明を行うことにより、新規分子標的薬の探索を行っている。



皮膚科学研究室

5. 蕁麻疹・血管性浮腫の病態解明研究

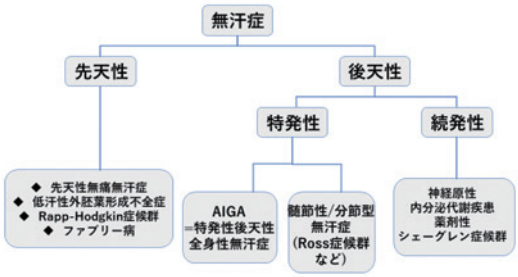
蕁麻疹や血管性浮腫では、アナフィラキシーや喉頭浮腫などを合併し致命的となることがあり病因の究明や病態の解明が重要課題である。蕁麻疹や血管性浮腫はあらゆる診療科で遭遇する可能性のある比較的頻度の高い疾患であるが、病態解明や治療法は十分には確立していない。本学皮膚科学教室では、当院アレルギーセンターとも共同して蕁麻疹や血管性浮腫の細胞レベルでの病態解明を進めている。



6. 発汗異常症の新規治療法の確立と病態解明

無汗症/乏汗症には下記のような多彩な疾患が含まれ、中でも特発性後天性全身性無汗症（AIGA）は国の難病に指定され増加傾向であるが、AIGAの病態解明は不十分で治療法は確立されていない。本学皮膚科学教室では、客観的に捉えにくい発汗異常症の診療システムを構築し、特にAIGAの新規治療法の確立と病態解明に向けた研究を進めている。

無汗症、乏汗症の分類アルゴリズム



皮膚科医局